



『何処を向く 俺はこっちだ百合の花』今境内はどこを向いても百合だらけ。咲かせたい本人の意思は尊重してはいますが、「お寺だけに、これだけあると、垂れたこうべのようでちょっと・・・」という人も多い。

楽音

佛歴二五六五 西歴二〇二二
令和四年九月号

発行 楽音寺 住職 内藤睦雄
電話 090-3140-3931 (携帯)

0553-47-3475 (お寺)

FAX 0553-47-3495 (只今使用不可)

寺庭 090-8643-0852 (藤井牧子)

九・十月の楽音寺住職

九月一～二日 無相教会(御詠歌)研究会 本山

五、六日 九州東教区拡充大会

十五日 東京教区拡充大会

二十～二六日 秋彼岸 (仏教週間)

二七、二八日 瑞巖寺講習会 宮城

十一・二五日 坐禅会 朝六時三十分

(二五日は大和村棲雲寺で)

十月十二～十四日 全国奉詠本山大会

九・二十三日 坐禅会 朝六時三十分

今月の掲示板

樹の上の

ピエロが落とす桐一葉



樋口一葉は塩山の枝垂れ桜の慈雲寺様にその墓地があることは有名です。山梨誇りの女流作家ですが、「一葉」の名にはいくつか由来があるようです。

インドの僧達磨さんが中国に禅を伝えようと南部広州にたどり着き、梁の武帝に謁見したものの、中国はまだ禅を受けいれる土壌ではないとみて、都を立ち去ります。そして揚子江を渡って嵩山の少林寺へ行き、面壁九年をやり遂げるわけですが、達磨さんが揚子江を渡ったのが、竹の葉一葉で作った舟であったからという説がまず一つ。

有名な句に『桐一葉落ちて天下の秋を知る』とあるように、桐の葉は秋の到来を最も早く知ってその葉を落とすといわれていますね。そのことから小さな一つの変化を見て、全体の大きな動きを感じ取る、例えば極端ですが国家衰亡の予兆、流れを感じる。そんなところに由来が見いだせるでしょうか。

秋近く、樹の上から一枚、二枚と舞い落ちる一葉はなんとピエロが届けてくれたものだったのですね。彼は胸の内の悲しみを常に隠し通して道化を演じ、私らを笑いの渦に巻き込んでくれる。私たちだって普段何気ない顔は作っていますが、いろんなことを抱えています。でもその樹の下を通る一人、また一人を皆笑顔にしてくれるんですね。

ああ、これからは落ち葉掃きが大変、だなんて思わずに、ピエロの仕業だったんです。

臨濟寺専門道場へ掛搭

おそらく寝付いたとたん起こされた。きつと夜中に違いないと思いつながら、急いで衣を着て、ところが袈裟が着けられない。起こしてくれた人が直してくれて、とにかく経本を持って本堂の端に立つ。体育館のように広い、娘を連れてきたらきつと喜んで走り回らるだろう。外は真つ暗だし、それにしてもこんなに寒いのに障子が全開、閉めればいいのに、といういろ思う。全身楽器かと思うほどの雲水さんの甲高い声とどでかい木魚。観音経かな、すぐ続いて読もうとしても速くてどこを讀んでいるかわからない。はたと、昔、修善寺物語という映画を思い出した。作曲家の黛敏郎氏が、どの部分か定かではないが、雲水が唱えた般若心経を挿入させた映画だった

と思う。さらに、黛氏の作曲された「涅槃」という交響曲にも、何の陀羅尼だったか入っているのを学生時代にレコードで聞いて感動したことを覚えていいる。単調で抑揚はないが力強くて、音量のためだけに腹に迫るその声が、今、目の前で耳にして突然思い出したものだ。西洋音楽のもととなる教会音楽は、あの教会の尖塔のごとく高く、一筋に神の国を指しているような超越的な感覚を受けるものに対して、奈良平安の異端児の様な禅宗の音楽は、深く心に迫るもの、内面性を観ようとしているのではないだろうかと思いついた。今本堂でのお経があまりに速く、ついていけないことをいいことに、初日の朝課は、本堂に充満した雲水さんの声に、つい自分の世界に浸ってしまった。私もあの雲水さんの仲間に入れるのだろうか。

編集後記

今年も孫二人と共に、お盆の二日間、県内の檀家さんのお宅に上がらせて頂きました。その際はもったいないほどのお心遣い、ありがとうございます。このようなきっかけで、彼らが先々順調に育ってくれたらと願ってはいませんが果たして・・・。

お盆の棚飾りは、どのお宅も工夫をされていて、棚経に何う一つの楽しみともなっています。この時期畑作業の家人もいらして、留守の時もありますが、毎年同じ頃ですから支度はしておいてくださり、私もお仏壇の場所は心得ています。どなたもおいででなくても、蠟燭とお線香に火をつけ、おいしそうな桃や黒光りの巨砲を一瞥、「チーン」その日はとても蒸し暑く、お経の途中の息継ぎの時、

ちょっと時間を止めて一粒の巨砲を手に取り口へ。なんと甘くて薰り高くジュシーで、喉を無事通過できるかと危ぶむほどの大きさに堪能。御詠歌も唱え終わって立とうとしたら後ろから「住職さん葡萄好きだねえ」いないと思って、いやあ面目ない、何日も経たずに女房の知るところとなり『御用!』

私の子供のころ、『おさがり』という言葉が使われていて、兄のお古を弟が着るという意味と、頂き物やお供えものを本堂本尊さんや庫裡にある仏壇(お内仏と呼ぶ)から頂くことを言いますね。お佛飯も必ず朝の食卓に乗っていました。つい何日間かお供えして、折角の物が『おさがり』として我々生き仏の口に入り難くなってしまうのは勿体ない。お供え物の供えた後、自戒を込めて工夫をしたいところですよ。